

英語の使役動詞における非定形補部節の統語構造と通時的発達について

外 翔太

1. 導入

本稿では、使役動詞 *make*, *let* を扱い、その補部構造に注目する。現代英語における原形不定詞の構造については、Radford (2009) に基づき、(1) に示すように、動詞 *have* が出現した際の接語化が妨げられる点や、(2) に示すように、虚辞代名詞 *there* が出現することから、(3) に示すように不定詞標識 *to* の空対応形(\emptyset)が主要部を占める TP であると仮定する。

- (1) * I can't let [you 've my password] (Radford (2009: 111))
(2) Let [there be peace] (Radford (2009: 111))
(3) [TP DP [T' \emptyset [EPP] [_{v*P} t_{DP} [_{v*} V+v* [_{VP} t_V ...]]]]]

本稿では、*make* と *let* の補部には ECM 構造と同様の構造が見られたことを、先行研究や歴史コーパスを用いた調査から明らかにした後、現代英語の原形不定詞構造へと収束する過程が 2 つの動詞で異なることを示す。

2. 原形不定詞と ECM 構造の史的発達

本稿では、原形不定詞構造の発達について、Tanaka (2010) に従い、(4) に示されるように、14 世紀後半ごろに動詞的な投射のみから成る構造に、機能投射である TP が出現したと仮定する。16 世紀まで見られた動詞的な投射のみで構成されていた原形不定詞構造を BI(a) とし現代英語と同様の TP を含む構造を BI(b) とする。

- (4) a. ME~16c: [_{v*P} DP [_{v*} V_i+v* [_{VP} t_i ...]]] (= BI(a))
b. late 14c~: [TP DP_i [T' \emptyset [_{v*P} t_i [_{v*} V_j+v* [_{VP} t_j ...]]]]] (= BI(b)) (adapted from Tanaka (2010: 391))

また、Tanaka は、機能範疇の出現について、(5) に示される 2 つの要因を提案し、原形不定詞における TP の出現は(5ii)によるものであると主張している。

- (5) (i) reanalysis of an existing (lexical) element as a functional category
(ii) emergence of a new functional category that does not result from an existing (lexical) element
(Tanaka (2010: 394))

次に ECM 構造の発達については、Tanaka (2007) に従い、後期中英語において出現したと仮定する。Tanaka は、不定詞標識 *to* が担う素性の変化に着目し、初期中英語において *to* が EPP 素性と構造格付与に関する素性を担うことにより、(6a) に示されるような構造が出現し、後期中英語において *to* が EPP 素性のみを担うことにより、(6b) に示されるような現代英語と同様の ECM 構造が出現したと提案している。前者の構造を ECM(a)、後者の構造を ECM(b) とする。なお、Tanaka は ECM(a) の構造は 16 世紀まで見られたとしている。

- (6) a. EME~16c: [TP DP_i [T' to [_{v*P} t_i [_{v*} V_j+v* [_{VP} t_j ...]]]]] (= ECM(a)) (cf. Tanaka (2007: 54))
b. LME~ModE: [TP DP_i [T' to [_{v*P} t_i [_{v*} V_j+v* [_{VP} t_j ...]]]]] (= ECM(b)) (cf. Tanaka (2007: 59))

ECM(a) は、*to* との Agree により補部節の主語が格付与されるという点において現代英語の構造とは異なる。また、ECM 構造における TP は *to* の再分析により生じた為、原形不定詞における TP とは出現方法が異なる。

3. コーパス調査と分析

YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE2 を用いて、能動態 *make* が取る補部を調査した山村 (2015) は、中英語では半数以上の事例で *to* 不定詞が選択されていたが、初期近代英語では原形不定詞の事例が大半を占めるようになったと述べ、表 1 の結果を示している。

表 1: 能動態 *make* の補部に生起する不定詞 (cf. 山村 (2015: 10))

	PPCME2 (ME)	PPCEME (EModE)	PPCMBE (LModE)
原形不定詞	139	359	147
<i>to</i> 不定詞	241	127	36

また、後期中英語から初期近代英語のテキストを調査した Iyeyri (2018) は、能動態 *make* の補部における *to* 不定詞と原形不定詞の割合の逆転は、16 世紀後半に起こったと述べている。これらデータに対して、内部構造に関する 2 節で概観した分析を適用すると、使役動詞 *make* の非定形補部節は表 2 に示されるように変化してきたと分析される。相対的に数が多い方を実線、少ない方を点線で示す。

表 2: 使役動詞 make における非定形補部節の内部構造の変遷

	EME	LME	ModE	PE
原形不定詞	BI (a)-----	-----	→	
		BI (b)-----	-----	→
ECM 構造	ECM (a)-----	-----	→	
		ECM (b)-----	-----	→

表 2 から、初期中英語における原形不定詞及び ECM 構造の対立は、実際には BI(a)と ECM(a)の対立であること、そして後期中英語から初期近代英語にかけては、原形不定詞と ECM 構造のそれぞれに 2 種類ずつ異なる内部構造が存在し、結果的に 4 種類の構造が存在していたことが分かる。そして、初期近代英語以降は現代と同じ BI(b)と ECM(b)の対立に移行したといえる。また、相対的な割合については、16 世紀の前半までは ECM(a)と ECM(b)の方が BI(a)と BI(b)より多かったが、後半以降はその割合が逆転したといえる。

次に、使役動詞 let の補部について分析を与える。本稿では、PPCEME, PPCMBE2 を用いて、山村 (2015)や Iyeiri (2018)などでは言及されていない let の非定形補部節に関して調査を行い、表 3 に示す結果を得た。

表 3: 能動態 let の補部に生起する不定詞

	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3
原形不定詞	47	1	156	131	378	580	459
to 不定詞	2	0	5	4	10	6	2

M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1570), E2 (1570-1640), E3 (1640-1710) この結果から、使役動詞 let については、中英語から一貫して、原形不定構造(BI(a), BI(b))を多く補部を取ってきたといえ、表 4 に示されるような補部の変化を経験したと分析される。

表 4: 使役動詞 let における非定形補部節の内部構造の変遷

	EME	LME	ModE	PE
原形不定詞	BI (a)-----	-----	→	
		BI (b)-----	-----	→
ECM 構造	ECM (a)-----	-----	→	
		ECM (b)-----	-----	→

また、TP の出現方法に注目すると、make は通時的に出現方法が異なる 2 種類の TP を補部に取りっており、主流となる構造の割合が変化した後、一本化したといえる。一方、let に関しては、一貫して叙述認可の目的で出現した TP(BI(b))のみを補部に取りっていたため、make とは異なり、to の再分析により出現した TP(ECM(b))が主流である時期はなかったといえる。この分析は表 5 にまとめられる。

表 5: 使役動詞 make と let の TP 補部の発達過程の違い

	後期中英語 ~ 16 世紀前半	16 世紀後半 ~ 近代英語	現代英語
make	ECM(b) > BI(b)	BI(b) > ECM(b)	BI(b)
let	BI(b) (> ECM(b))	BI(b) (> ECM(b))	BI(b)

参考文献: Iyeiri, Yoko (2018) “Causative *Make* and its Infinitival Complements in Early Modern English,” *Explorations in English Historical Syntax*, ed. by Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Liesbet Heyvaert and Charlotte Maelberghe, 139-157, John Benjamins, Amsterdam. / Radford, Andrew (2009) *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*, Cambridge University Press, Cambridge. / Tanaka, Tomoyuki (2007) “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-47. / Tanaka, Tomoyuki (2010) “Agreement, Predication, and the Rise of Functional Categories in Nonfinite Clauses,” *English Linguistics* 27, 374-398. / 山村崇斗 (2015) 「英語史における使役 make の補部構造の変遷について」『筑波大学論叢現代語・現代文化』15, 1-13.

コーパス: Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*(PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.